
天使のレリは夢を見ない (R)

小田中 慎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使のレリは夢を見ない（R）

【Nコード】

N6307I

【作者名】

小田中 慎

【あらすじ】

「お前は夢を見ない。見るのは未来につながる予兆だけだ」彼女がレリエル。軍が作り育んだサイキック兵器。「目など邪魔なだけだ。そんなものがなくともお前には真実が見える」兵器は命令に従い任務をこなすだけ。自分がそれ以外の生き方をするなど考えもしなかった、あの出来事が起きるまでは・・・

*0 (前書き)

この作品についてのお断り

その1

この『天使のレリは夢を見ない』は、作者のブログ『RE:BI
RTH〜リバース』で発表された『闇と光と花と棘』を改題、改作
したものです。

この作品では視覚障害者の主人公が登場し、また、他に障害を持
つ人物も登場します。内容に一部不適切と思われる表現が登場す
る場面もあり、登場人物による障害を持つ事が良いことであるか
のような不適切な発言もありますが、これは本フィクションを創作す
るにあたり、主人公の過酷な人生を表現するため必要と判断したた
めです。

全く純粋に創作表現でありますので、現実の障害を持つ方々を誹
謗・中傷・蔑視する意図は全くありません事を最初にお断わり致し
ます。

また、障害者に対するいわれの無い仕打ちや誹謗を、例え創作上
においても許せない、または不快感を持つ可能性が少しでもある、
とお考えの方は、本作はお読みにならない事をお勧め致します。

なお、本作を含め作者のブログにおいては『障害者』という表記
をさせて頂いておりますが、この表記法が一部問題であるとする動
きがある事を踏まえた上で、作者は『障害者』という表記が『障が
い者』『障害者』『身障者』などの表記と比較して、未だ一般的表
記として認知されており、また『日本障害者協議会』など、関係団
体の表記が旧来のものであるため使用しております事もご了承下さ
い。(08年2月)

その2

その後、この作品は拙作「RE: BIRTH」のスピンオフ作品との位置付けから独立短編への改作を行い再発表の運びとなりました。題名の「R」はライトを意味しています。(09年11月)

わたしは自分の出生について多くを知らないし、知りたいと思っただこともない。わたしは最初から欠陥品として生まれた、と聞く。欠陥が利点へ転じると信じた男の夢が私を生み出したのだそうだ。

普通、欠陥品は不合格の烙印を押されて捨てられる。だれも見向きもしない。わたし以前に製造されたサイキック兵器の中には、わたしのような欠陥品が多く、それらは製造直後に廃棄処分となったという。

サイキックの研究と兵器としての可能性を探っていた機関は、ただ単に『中央研究所』と呼ばれていた。軍の奥深く極秘裏に存在し、この国の首都に程近いとある射爆場の片隅、弾薬庫に偽装された建物の地下部分にあった。

数限りない実験と臨床試験が重ねられ、試行錯誤が繰り返された。成功と失敗。前進と後退。それは二十年にも及び、漸くひとつの結論に達したのだ、と言う。多くの偶然と僥倖、そして幾多の成果と犠牲の積み重ねから一つの完成品が生み出された。後はそのプロトタイプ・L O T O 1 を基にして大量生産へ移行すれば済む、誰もそれがそう思っていた。しかしことはそう簡単ではなかった。

その最初の完成品であるL O T O 1。彼女は『ルシフェル』と呼ばれて恐れられているけれど、普段、普通に接してみれば、内にあたたかいモノを秘めた女性で、別に殺人鬼でも異常者でもないことが分かる。しかし彼女はわたしたち特殊能力者、軍言うところのサイ第一号であり、それまではオカルトの世界だったサイキッカーを攻撃兵器として認知させた人。その能力については、私も彼女に拮抗する能力者だとは思うけれど、人物については奥深さといいい身体能力といい、とても適う人じゃない。

そんな彼女からクローンを作る試みは困難を極めたのだそうだ。理由はよく分からないけれど、試験体の多くは成長することなく細

胞分裂を停止した。それでも中央研究所は怯むことなく十数年余りを費やして、漸く彼女に匹敵するサイを何人が作り出し・・・わたしが生まれた訳だ。

話は変わるけれど、最近わたしは以前に増してフラッシュバックをよく見る。『フラッシュバック』とは人によつては予知夢と呼ぶ視覚野の一時的異常のこと。それは写真のように動かずに一瞬で消えるときもあれば、映画のシーンのように数分続くときもある。その現象自体はサイであるわたしにとって珍しいものではなく、十歳のある日を境に度々訪れるようになった。しかし、大抵はあまり気持ちの良いものではない。見るのはおぞましいものや心が沈むような光景が圧倒的に多くて、自分の将来ばかりでなく世の中の危機を知らせたり過ちを見せたりを繰り返す。それが初めて起きた時、わたしを指揮監督していた管理官はこう言ったものだ。

「お前は二度と夢を見る事が出来なくなる。見るのは全て未来につながる予言だ」

確かにその日以来、夜に見る本物の夢を見た記憶がない。そんな具合だったから、わたしはフラッシュバックを好きではなかったし密かに恐れもした。ところが最近のそれは、わたしをとてモリラックさせ軽い躁状態にさえする代物なのだ。わたしはそれが起きるのを楽しみにするようになった。

わたしが見るのはとても居心地の良い場所、そしてわたしの話を聞いてくれる人たち、そう、わたしを人として認めてくれる人たちに囲まれて・・・それは束の間わたしをとてもしあわせな気分させる。

「ナンバー35J、です」「A、A、B、C、C、C、B」「不合格」「ナンバー35K、です」「B、A、A、C、C、C、C」「不合格」「ナンバー35L、です」「DEAD」「次」「ナンバー35M、です」「DEAD」「次」「ナンバー35N、です」「B、B、A、C・・・」

結果を読み上げる白衣の男。それに答える男も、聞き入る男や少数の女も全て白衣を着ていた。彼らは円卓を囲んで分厚いファイルを幾冊もお互いの間に胸壁のように並べ、報告の声以外紙を繰る音だけがしていた。やがて最後の結果が読み上げられると、今まで黙って聞いていた初老の男が立ち上がる。

「シリーズ35は全てNG。開発は失敗と認定する。以上」
ボタンボタンとファイルを閉じる重い音。男たちは一斉に立ち上がると台車にファイルを重ね始める。

「ちよつといいか？」

男が一人、歳の頃は40半ば、台車にファイルに乗せていた一人に声を掛ける。声を掛けられた方は鼈甲縁の眼鏡を掛けた30代後半、2人とも研究者然としているが、40男の方は左耳から頬に掛けて紫色に変色した火傷の跡が目立ち、その目は温かみの欠片も無い濃灰色だった。

「なんでしよう？」

30代がファイルを積む手を止め振り返ると、40男は何も言わずに顎を振って廊下へ誘う。

「どうしてこうもポテンシャルが低いんだ？」

廊下に出るなり前置き無しで40代が言つと、
「もう、クローンで狙うのは限界だと思いますよ。姿形は合っている。しかし第4から第6要素がこうも低いのは、おっしゃる通りポテンシャルがこれ以上期待出来ないからです。何故低いのかは今後

の研究次第で明らかになるでしょう・・・それはそうと、経済企画局の『バイオ研』で国大の秀才を動員してなにやらやっているのですが、あちらとの連携は考えているのですか？」

「それはない。あちらの研究は我々軍の研究とリンクすべきでない、との上の考えだ。今は諦める」

「残念ですね、全くお役所と言うタテワリは」

「おい、滅多な事を言うもんじゃないぞ！」

声を荒げた40代に30代の男は悪びれもせず頭をペコリと下げ
る。

「済みません。ところで、次の36でやって見たい事があるのです
が・・・」

40代は白衣のポケットから使い古されたパイプを取り出し、啜
える。

「八方塞りだからね、何でも歓迎する。後で提案書を出したまえ」

「ありがとうございます」

煙草を詰めていない飴色に光る海綿製のパイプを弄びながら、4
0代はじろりと30代を見る。

「おい、何を考えている？」

「出所は余りよろしくは無いのですがね。随分昔の話ですがナチス
がやっていた双生児の実験で、興味深いデータがありました」

「ほう、メンゲレたちか？」

「そうです。障害と双子のシンクロとの因果関係、とでもいうのか。
・・・」

「ふうん。報告書を楽しみにしているよ」

暗闇の中、静まり返った中に水が流れる音が響いている。せせら
ぎの音と野鳥の声、そして微かに風の音が重なる。それは聞く者に
深山幽谷しんさんゆうこを想わせた。部屋の中央に木の背付椅子が一脚、そこに7、
8歳の少女が座っている。

「36G、もう一度行く。用意はいいか」

声が響く。マイクを通した声、中年の男の声だ。

「用意はいいです、お願いします」

「では、用意」

暫く間が空き、深山の音が響く。やがて、

「5・・・4・・・3・・・2・・・1・・・スタート」

特に変化は、ない。少女は椅子に座ったまま身動きしない。目は開けたまま、闇の奥を見つめるかのよう。その1分後。

「終了、楽にせよ」

声が響くと、無意識に呼吸を止めていた少女は大きな溜息を付き、息を吸い込む。額の汗が珠のようにいくつも浮び、それが流れて目に入る。が、目は瞬きもせず、また、目に沁みた様子も見せない。

「36G、もう一度だ、用意はいいか」

「はい、お願いします」

「用意」

30分後、部屋の明りが点く。この部屋は分厚い扉と防音壁で囲われ、窓の無い録音室のような3メートル四方の部屋。天井には3列に蛍光灯が並び眩しいほどの明るさだった。中央の椅子に少女は未だ座ったままだったが、頭を垂れ肩で息をしている。両手はトレーニングスーツのズボンを硬く握り締め、身体が小刻みに震えている。

開錠の重い音と共にゴロゴロと音を立て、扉が横に開く。白衣の男たちが4人、素早く部屋に入る。更にその後ろから、陸軍の濃紺の制服を着た男と鼈甲縁の眼鏡を掛けた白衣の男が並んで入って来た。

「36G」

声を掛けたのは後から入って来た白衣の男。その声は先程来マイクを通して流れていた声だ。

「28回中19回。68%だ。まだまだ安定度が足りない。85%までは上げないと。いいね？」

早口の男の声に少女はゆっくりと青白い顔を上げる。

「分かりました、管理官」

白衣の男は制服の男に、

「36Gは中々です。プラン・オーデインでは一番の成績でして」
すると制服の男は、36Gと呼ばれる少女の方を全く見ないまま、
「よろしい。実験結果が安定次第、この方針で次回LOTを進める。
進捗報告は速やかに上げるように」

白衣の男が敬礼する。制服の男が早足に退室すると、少女は喉を
詰まらせるような声を上げ、床に吐瀉としゃした。そんな少女を見ていた
白衣の男は、感情の乏しい声で、

「36G。この後は予定通り身体訓練だ。15分間の休憩を許す。

15分後、トレーニングルームで」

そして白衣も去って行く。少女は未だ床に跪いたまま、その後姿
に呟くように答えた。

「はい・・・管理官」

わたしは自分の目が見えない、という事実気付いたのは4歳のとき。白衣の男の一人から教えられるまで、わたしは自分が『見えている』とばかり思っていた。

この2つの眼球が単なる飾りで、わたしは最初から目が見えないことを前提に造られた、と白衣の男は言った。4歳ではそんなに理解は出来なかったが、わたしが見ているものは、わたしの『能力』が生み出す、視覚以外の4感と第6感によって頭脳にイメージとして再構築された周辺情報なのだそう。見ているものが実際そのものでなく、わたしの脳が作り出した画像だ、^{イメージ}と言われても余り納得出来るものではない。

けれども、どうしてわたしに見えるものの色や形を答えさせるような実験が2歳の頃よりあったのか、と言う疑問の答えがこのときに分かった。彼らは、自分たちの兵器の出来映えを見ていた。新型戦闘機に装備されたレーダーか何かの探知装置の具合を確かめるかのように。

「目などお前たちには邪魔なだけだ。」

ある時、養育官の一人がそう言った。

「視覚が一番騙されやすい感覚だ。そんなものがなくとも、お前は情景を捉え真実ありのままの光景を頭に描く事が出来る。敵の目眩ましなど無力だし、眩しさや暗闇による行動の制限がない」

男はそう言っただけでわたしの頭を撫でた。わたしに躊躇無く触れるのは、彼を含めた養育官と呼ばれる普段の世話や一般的な社会常識を教育する、言わば親代わりの役目の者たちだけだった。他の者は研究者も軍人も無視するか物扱いかどちらかの対応だった。

しかし、だからと言って養育官たちは愛情をもつてわたしたちに接している訳ではなかった。よく訳もなく殴られたし、さんざ悪態も吐かれた。そんなことが日常茶飯事だったので、養育官が機嫌の良い時は無条件に楽しかった。そのときだけは社会教育に登場する『家族』に近い何かを感じることが出来たからだ。

§

実験と訓練は毎日繰り返された。様々な種類の実験があり、実験と訓練がモザイクの様にちりばめられ、その合間に教育が施された。睡眠時間は4時間。一日の残り20時間は全て実験、訓練、教育だった。

教育は、彼女が造られた理由からすれば不思議な位、内容の濃い充実したものだ。既に3歳から英語と算数が始まり、6歳になる頃には通常中学一年で学ぶ内容で授業が行なわれていた。

元来彼女たちは頭が良い。IQは200に及び天才の域、中でも36Gの彼女と36Bの男児は250を越え、2人の授業は特別に大学クラスの内容でカリキュラムが組まれた。

では、何故このように天才児並みの教育を施しているのか？理由はただ一つ。彼らは人の頭の中、心の領域にまで侵入するからだ。

敵の指揮官の作戦を探るばかりでなく、科学者、政治家、ありとあらゆるケースに備えなくてはならない。せつかく頭に侵入しても得られた思考が理解出来なければ意味がない。そのため、彼女は『外』へ出る前から既に世界の知識があつた。実験でも、遠隔地への思考伝達や読取り（これがスムーズに行なえる様になれば『思考会話』が操れる）の際、相手の記憶から外の世界の情景や常識を知る事が出来、それはそのまま彼女の知識として蓄積され、世界の理解に役立つた。

当初、こうした広範囲の教育は、兵器としてのみ存在している彼女たちの自我を自覚めさせる危険な行為だ、として反対された事

もあつた。しかし、実験により、限定した最小限の知識では思考潜入や思考会話だけでなく、彼女たちの最大の武器、精神攻撃や心身操作にも影響が出る事が実証され、高度な教育は『サイ』を育成するための重要な要素となつた。

彼女が10歳を迎える頃には教育は大学卒業時まで進み、訓練は実際に『外』へ出での実践段階にまで進んでいた。特に攻撃訓練に重点が置かれ、実際の緊迫感の中で任務を達成出来るよう、色々な『ステージ』が用意された。

最も多いケースはマンハントで、徴兵訓練部隊からの脱走兵の追跡や逃走犯の追跡と発見など、訓練の材料はいくらでもあつた。

人質立て籠もり事件などは格好の『教材』であり、発生すれば直ちに軍中央からの要請の形で中央警察に協力の申し入れがなされ、膠着状態ともなれば、解決のきっかけを作るために彼女たちが派遣された。

そんなある日、彼女、ナンバー36Gにとって忘れられない転機が訪れた。

* 2 (承前)

その日も訓練とデータ収集を兼ねた任務が発令され、彼女はサポート部隊と共に首都郊外の住宅地へ向った。そこでは24時間前から麻薬常習者が立てこもり事件を起しており、その現場で速やかな解決を図る、と言うものだった。

ブリーフティングの後、彼女は一人で問題の二階建ての敷地へ向う。時間は午後の3時、まだ日も高く到底人質救出が隠密裏に果たせる時間ではない。

ある意味最悪ともいえる時間に、彼女は隣家の庭から低い生垣を越えて庭に侵入した。事前に犯人と人質になっている犯人の12歳になる長女に『アクセス』して暗示を掛け、敷地内の不審な動き、特にリビングの窓を割る音を無視するように働き掛ける。もつと成長した能力者なら、直接この段階で犯人に対する精神攻撃を行い倒すが、彼女はまだ相手を『見て』間近に感じなければ有効な攻撃を行うことが出来なかった。

しかし真の理由は、高度のプレッシャーの下で彼女の潜在能力が^{ホテンシャル}どれだけ上がるのか記録をとりたい、という研究班からの要請によるところが大きかった。

庭から直接窓を破って入ったりリビングでは、割れた食器が散乱し、椅子が壁に叩きつけられたのか粉々の破片と化している。破片を踏まぬようにゆつくりと抜け、狭い廊下を階段に向う。すると階段の横、バスルームの脱衣所にブルーネットの髪の水がいた。風呂から上がったところを刃物でやられたのか、全裸で俯せに倒れ、血溜りは既に乾き始めて粘っていた。彼女はそちらを眺める事をしなかった。そのまま階段を二階に上がる。子供部屋のドアはノブが壊され上の蝶番が外れ、扉が半壊して内側に倒れている。その代わりにベッドのバリケードで塞がれてその先、部屋の中に犯人と人質

がいた。

色褪せた金色の髪を後ろで束ねた30代後半のがっちりとした体格の男。頬がこけ、血走った目の下の隈が黒く深い。右手にはサバイルナイフ。左腕に抱えられた女の子。12歳位で、彼女の2、3歳年上に見える。ベッドがへし折られ、壊れた椅子が重なって入り口を塞ぐ前、彼女は躊躇無くその細い隙間から身を振りながら中に入る。

「おい！入るんじゃない！」

男が慌てて怒鳴ったが、彼女がまだ幼さの残る10歳位の少女と見ると、呆気にとられたように黙って見つめるばかりだった。

やがて彼女が無表情のまま二人に正対すると、男は、

「どこから入った？マリーの友達か？」

しかし、彼女は何も答えない。抱き抱えられた少女は、男に、

「ダデイ、お友達だから助けてあげて」

そして初めて見る彼女に向って

「早く帰って」

しかし、彼女は無表情に二人を眺めるだけ。男はそのなりに不安を感じたのか、

「おい、なんだお前」

と言い掛けた途端、ひつ、と叫んで立ち上がった。男は少女を離すとナイフも落とし、頭を抱えるようにして泣き出した。泣きながら息を詰まらせ何かを言おうと、口を何度も開け閉めしたが声が出ない。やがて頭を抱えたまま床にひっくり返った。

いつもならこの手の場合、犯人が卒倒するか武器を取り落としたところで警官に偽装したサポート部隊が突入する。しかし今日は違った。攻撃を続け対象を殺せ、と命令されていたのだ。

彼女は、床の上をのた打ち回る男を何の感情も伺わず、ただ眺めているように見えた。実際はその時、彼女最大の武器を総動員して男に不快、悲しみと頭痛を浴びせ掛けていて、その集中が彼女に隙を産んだ。しかし、油断した事によって彼女がユニークな存在と

なるきっかけも訪れたのだ。

最初は集中する彼女の思考に、ほんの一瞬流星のように走る不安として認識された。彼女はそれが意識される前に邪念として退け、男に対する攻撃を続けた。すると、今度は稲妻のようにはつきりとしたイメージが彼女に浮かび、消える。そのイメージが意外で信じられないものだったので彼女の集中が緩み、今の現象を思わず振り返る。

(何?今の)

すると男が肩で息をしながら起き上がろうとした。彼女は慌てて集中に戻る。男は再び悲痛の叫びを上げ両手で頭を抱え、床へ頭を叩きつける動作を繰り返す。

「あなた、なの?」

部屋の隅に立ったまま呆然と父親の異常を見ていた少女が、彼女の方を見る。

「ダデイをこんなにしたの、あなた、なの?」

しかし、後少して男を沈める事が出来る彼女に少女の相手は出来なかった。その瞬間、フラッシュバックが・・・

同じ部屋同じ光景、男と少女。しかし二人とも立ってこちらを見ている。少女が何か言う。しかし何と言ったのかは分からない。そして少女は落ちたナイフを拾って・・・

意識が現在に戻る。男は再び立ち上がるうとしている。少女はいつのまにか部屋の真ん中に立ち、ベッドの残骸を背に立つ彼女との間は1メートル位、すると少女は足元を見て、そこに落ちていた父親のナイフを素早く屈んで拾い上げた。何か不思議なものでも見るような、そんな仕草を見ると、やがてナイフを右手に握り、目が彼女に向けられる。少女は無言のままナイフを振り上げると、そのまま彼女の方に一歩二歩と近付く。その間、彼女の方は魅せられたように立ちすくみ、少女が自分に切りつけようとしているのを硬直したまま見ていた。

次の瞬間。ベランダ側の窓ガラスが割られ、外から黒い物体が投

げ入れられた。

閃光と派手な爆発音、直後飛び込むサポート部隊強行突入班。立ったままの男は、強行突入班の巨人二人に代わる代わる殴られ、やがて気を失ったところに手錠がかけられる。閃光音響手榴弾の爆発直後、座り込んだ人質の少女は同じく走り寄った別の二人に抱き起こされ、そのまま割れた窓へ、ベランダへと連れ去られる。

彼女はその間目も閉じず、耳も塞がずにしゃがんだまま。やがて中の一人がフェイスガードを跳ね上げ、彼女の方へスタスタと歩いて来ると、ぐいっと彼女を引き起し、間髪置かずに素早い往復ビンタを浴びせた。

「オイ！安心してんじやないぞ！ったく、手の掛かるガキだ」

男は吐き捨てる様に言うと、

「来い」

腕を掴んで、引き摺るようにしてベランダに掛かったアルミラダーまで連れて行き、

「降りろ、お前の飼い主が呼んでいる」

そして、漸く現実に立ち返り、ラダーを降りようと身を乗り出した彼女に耳打ちする。

「ご主人様はカンカンだぞ。お前、きつと夕飯は抜きだな」

下では管理官が待っていた。彼女は普段白衣姿を見慣れているせいか、常々彼の軍服に防弾チョッキ姿は似合わないと思っていた。彼女はさっと気を付けと敬礼をする。管理官は無表情のまま、ほんの一瞬目線を合わすと無言で顎をしゃくり、装輪装甲輸送車の方へ彼女を連れて行った。

* 2 (承前)

薄暗い車両の後部兵員室に入ると、振り返った管理官は彼女に、「脱げ」

とだけ言い、腕組みをして待つ。彼女は何の躊躇もなく、トレーニングスーツと下着を脱ぎ、上半身裸になる。

すると、管理官は腕組みを解いて彼女に近付き、機械的な手際の良さで彼女の肌に止められていた観測機器の配線やパッドを外し、腰にベルト止めされていた機器を外す。それを車両の前部、機器ラックの前に座る女に手渡す。ラックにはぎっしりと計器類が並び、モニター画面と当時最新のコンピューターがほの暗い照明に鈍く光っていた。

女は、厚手の文庫本程度の大きさの機器を特殊なケーブルで目の前の機器に繋ぎ、キーボードにコマンドを打ち込む。するとカセツトデッキが早送りするかのような音と共に、コマンド用のモニターとは別のモニターにオシロスコープに似た黒地に緑の線が踊るグラフ状のものが現れた。女が更にコマンドを打ち込むと、揺れながら流れていたグラフがスピードを上げ、やがて画面右上表示された4ケタの数字と、画面左上に流れるカウンターと思しき数字が近付くと、女は再び何かを入力した。グラフはゆっくりと走り、やがて左右の数字が一致したところで止まる。

女がモニターを指でなぞり、何かを呟くと、管理官はその横から覗き込む。やがて女は白衣の胸ポケットに差していたボールペンを取ってモニターの緑の波のある頂点を叩く。

「ここに特徴的な波形が見えます。また、精神交信の輻輳が見られます」

女はそこでちらりと彼女の方を見てから管理官へと視線を移し、「間違いない、と思いますよ」

「素晴らしい。我が国通算5人目の『予言者』の誕生だ」

管理官は珍しくにこりと笑うと、まだ上半身裸のまま佇む彼女を振り返る。

「36G、やったな、これで『名前』が貰えるぞ。ああ、服を着てよろしい」

彼女はゆつくりとトレーニングスーツの袖に腕を通す。全く無表情のまま、次の指示を受けるため直立不動となった。管理官は、まだ笑顔のまま、

「では、終了報告だ。ただし、二階に上がった後、お前は異常な現象を感じたはずだ。その部分は出来る限り詳細に報告しろ」

管理官が頷くと、モニター前の女が録音装置のボタンを押す。それを合図に彼女は話し始めた。

5分後、彼女が口を閉じ女がストップボタンを押すと、管理官は笑みを浮かべながら拍手の真似事をして、気を付けを続ける彼女の顔を覗き込んだ。

「正に典型的なフラッシュバックだ。しかも自らの危機を正確に予兆し警告している」

管理官はふと無表情に戻ると、

「だが、これでお前は夢を見ることが出来なくなったな。夢は予知に場所を譲る。脳に夢を見る余裕がなくなる訳だ。見るのは全て未来につながる予言、そういうことになるはずだ」

すると彼は再び笑みを浮かべ、彼女の肩を軽く叩く。

「しかし、そんなことは大したことではない。お前は能力者としての重要なステップを登ったのだからな。さあ、今夜は何でも好きなものを食べていいぞ、夜のカリキュラムは全て中止、自由時間を五時間与える。まだ肉は苦手か？そうか、魚は？ではそうしよう。ビデオでも見るか？ああ、新作アニメーションがある。それとも仮想敵国Bの歴史ドラマがいいか？原語だが、お前は解せるはずだ。そうか、では用意させよう」

管理官が、車載の無線電話から研究所に電話をする間、彼女はこ

の突然の変化に首を傾げ、浮かれている、と言ってもよい管理官を見つめていた。その時、彼女が考えていたのは、飯は抜きだ、と言ったサポート部隊の軍曹は間違っていたな、などというどうでも良いような事だった。

近未来の予知、と称されるフラッシュバック能力。実際は、サイが人間や脳を有する生物に思考潜入したり、サーチと呼ばれる遠隔探索を行ったりすることで、無意識にその個体の思考やら集団と個との関係やら本能的行動やらを予見し、その結果がイメージとしてリアルに頭に浮ぶ、どうやらそういうことらしいのだが、その能力を彼女がポテンシャルとして持っていた事が証明されたのだった。後部兵員室と運転席の隔壁に設けられたスライド式の小窓を開けた管理官が、研究所へ戻るようにと運転兵に伝えるのを聞きながら、彼女はふとあの少女の事が気に掛かった。しかし少女を探してサーチしたが、彼女も彼女の父親も捉える事が出来なかった。2人ともその頃には現場を離れ、軍の特殊部隊訓練施設へと送り出されていた。彼女は、2人が速やかに薬物を投与され記憶があいまいになる様に仕向けられた事にも気付くことはなかった。

わたしが予言者の称号を得て『レリエル』という名前を貰ったころ、わたしと同じシリーズで造られたナンバー36Bの男の子も、思考会話の長距離通信記録を打ちたて、注目を集め始めていた。彼は後に海外で極秘裏に実戦参加をして目覚ましい功績を上げ、『ラミエル』と言う名前を貰う事になる。

シリーズ36とは要するに製造ロット^{ロット}のことで、顕著な成績を残し、実戦化されたものだけが名前を貰えた。愛馬や軍艦、爆撃機などが命名される、あのノスタルジィのようなものだろう。名前が認知されていないキリスト教の教典に出てくる天使の名前になっているのは、その頃現われ、やがて軍にとり最大の敵となつて行くイスラム狂信テロ集団へのあてこすりらしいが、その時はなんとも妙なことを考えたものだ、と思った。

さて、わたしたちのシリーズ36は変則ロットで、前半4分の1、36Aから36Eまでと、後半36Fから36Uまでは同じシリーズでも製造方法が違っていた。ラミエルのロット、36Aシリーズは通常の遺伝子操作と人工授精による製造で、わたしのロット、36Fシリーズは同じ遺伝子操作でも、何故か様々な障害の因子をワザと含ませて障害者のサイ候補を作り出した。どうやらわたしたちのFシリーズが本命で、ラミエルたちは今までの方法で造られたところを見ると、比較のために製造された『当て馬』らしい。その中でラミエルは突然変異のように優秀な潜在能力者だった。案の定Aシリーズではラミエルだけが生き残り、他の4人は闇に消えた。彼は本当に運がいい。

ちなみにわたしたちが作られた頃には、同じシリーズでも卵子と精子の提供者は様々で、兄弟という訳ではない。だからわたしとラミエルは『同期』と呼び合っていた。

サイキッカー、軍言つところのサイは極秘の存在だったけれど、わたしがサイであると正式に認定された6歳くらいにはその数も10人を超えていて急速に実戦化が進んでいた。わたしたちの後に続くLOT44では6名が、その先のLOT47では、9名が実戦レベルになると言われていた。兵器だろうが製品だろうが、後から造られたものの方が性能は良く、ローコスト・ハイリターンなのは世の常だという。だから後に実戦化された者の方がポテンシャルは高いらしい。けれど、わたしの知る限り最初に実戦化されたLOT01の『ルシフェル』を超える能力者はいない。先輩に当たる何名かのサイや、ラミエルとわたしもそれなりだとは思うけれど、わたしが10歳の頃には極秘裏に非公式の戦闘で結果を残していたと思われる彼女に敵うとは到底思えない。とは言え、サイにもそれぞれに得意な技や苦手があり、個性があり、能力者同士本気で戦ったのもわずかな例しかないのです、誰が本当に強いのか、など、やりたくはないし知りたくもないのがわたしの本音だ。

けれど、いくらルシフェルが抜群の活躍をしようが軍にとっては所詮、武器は武器だった。物心付いた時からそれが当たり前のことだったので、わたしはそのことにずっと疑問を持ったことはなかった。先輩の何人かは、言わばスピードのエースである自分たちの待遇を向上して、もっと大切に扱え、と主張し始めていた。最初はそれに同調する気などまったくなかったけれど、成長し任務を重ね、次第に周りの様子が見えるようになって、現状が満足すべき状態ではないことを思うようになった。それは自分の存在理由やアイデンティティの問題で、そんなことを考え出したのは13歳になったところに起きたサイの脱走事件がきっかけだった。

§

(レリエル、聞こえる?)

(・・・ジエイ、なあに?)

(また、やつらにやられたよ)

(ひどいこと、されたの?)

(今日はそんなでもなかった。ちょっとぶたれたけど)

(彼らに逆らっちゃだめよ? いい?)

(うん、大人しくしてるよ、ぼくだってまだ、レリエルみたいになれる自信があるし)

(そうね)

(あと、少しなんだ。今日は少し調子が良くて、成功率は76%だった)

(よかったね、もう少しじゃない)

(うん、もう少しで合格だ。あとちょっとでコンスタントに85を叩き出せるよ)

(がんばってね。ほら、もう、黙りなさい。気付かれるよ)

(うん、わかった。またね)

(またね)

その頃には、彼女は個室を与えられていた。狭いことは狭いが、一人で使うことが出来る。しかし、この特権は彼女の様に結果を残し『名』を得たものと、それに準じたものだけに与えられた褒美だった。

ナンバーだけで呼ばれるもの、いわゆる『ナンバーチャイルド』は、軍の懲罰房と同じ設計図で建てたと思えない専用区域で集団生活をしていた。人工授精や遺伝子操作も、通常の人間を生み出す不妊治療のような目的で行えば成功率も高かった。しかし、軍が極秘に行っていたのはサイ兵器の製造。際どい操作を繰り返し、特殊な才能のみ優先して助長する歪んだ開発のため、病弱や体力が弱いもの、すぐに死亡するものが多発し、無事に育つものも能力が貧弱で様々な障害を持つものが多く、その結果を目の当たりにした研究者の中には神をも恐れぬ行為に自殺する者すら出ていた。

その頃専用区域に残されていたのは、そういった軍にとっては余

計物ばかりで、以前のように彼らが処分されなかったのは、軍に微かに残っていた倫理観のためではなく、次第に増える能力者の恨みを買うことを恐れていたことに違いなかった。

ジェイ、と呼ばれたのは36J。レリエルの同期で思考会話の訓練中、彼が間違った相手、すなわちレリエルに思考会話を送ったことで出合った。それ以来毎日のように会話をしてきた。彼女は彼を見た事はない。彼女は生まれてすぐに『有望品』として選別され、他の有望品と共に別の施設で育てられ、その後も彼女たちの道が変わることはなかったからだ。

2人は、会話だけで成立する友情を育んでいた。話の内容から、彼女は彼も障害を持つことを知っていた。しかし、その障害が何であるか彼は決して話す事がなかった。

彼女らが13の歳を迎えた時、その彼が脱走する、という事件が起きた。前日に、頑張って『シューティング』と呼ばれる技術訓練で合格とされる85%を出す、と宣言していたのに・・・

彼女はその事実を密かに他の同期から知らされたが、前日の彼の様子からそれを察知出来なかった自分を微かに悔いていた。分かっていたら、止めたからだ。軍からサイ候補が脱走するのはこれが初めてでなく、過去10例以上あるらしい起こり得る事件で、この時も一斉に捜索が開始された。そして、彼女が密かに恐れた事が起こった。

訓練の後、自室で本を『読んで』いた彼女の下を、管理官、養育官、そして見たこともない軍人が訪れた。

「レリエル、仕事だ」

養育官がニヤニヤ笑いながら言うと、管理官が、

「お前と同じシリーズのものが脱走した。つい4時間前のことだ。状況は追々知らせる。マンハント訓練にもなる。捜索に参加しろ」
「了解」

そう答える以外、彼女には何も出来なかった。ジェイは野外訓練の最中、管理官たちを幻惑させて逃走したらしい。彼の能力を低く

見積もり過ぎた管理官たちのミスとも言え、だからこそ彼はもう、おしまい、だった。軍は兵器の暴走など絶対に認めないし許さない。彼女ともう一人マンハントに参加する36Bが召集され、一緒にブリーフティングを受けた。支援チームは間接護衛のみ、獲物は二人だけで追い詰める、見つけ次第『処分』しろ、と命令された後、二人はジェイの消えた海岸線の沼沢地にある埋立地へと向うへりに乗り込んだ。

* 3 (承前)

そこはこの国有数の港湾都市郊外にある広大な荒地で、長年廃棄物処分場として沖へ沖へと埋め立てられていた。元来の岸に近い場所こそ開発されて宅地や商用地に变身していたが、沖合10キロも先へ行くと放置され、一部には危険な汚染物なども捨てられて立ち入り禁止となっていた。

この一角は軍の射撃訓練場や兵器実験場にもなっていて、サイが時折訓練する事もある全く衆目が及ばない場所。いくら広大とはいえ、逃げ場もない。可能性があるとしたら、海へ、入り江の反対側へと逃走することだが、それも泳げないジエイには無理だろう。

「楽しんで来い」

薄笑いを浮かべる軍属たちに見送られ、二人は夕闇迫る不気味な『ゴミの島』へ入って行った。

「さて、どうする？」

36Bが腕を組みながら言う。

「・・・とりあえず、先に進みましょう」

彼女は36Bとは幾度か組んで任務を遂行していた。その時も彼女の方が能力的に上であると思われており、実際名前もある彼女の方が指導する形となった。

「了解」

彼女は先に立って、廃棄物の山の間を走る巾10mの広い道を行く。道の両側は高さが5メートルを超えるゴミの山。この辺りはゴミが搬入されて20年以上経っているので、臭いなどは気にならないうが、浜風に舞うビニールの破片や埃が身体に纏わり付き、顔を打った。

1キロも行くと道は左右に枝分かれし、視界が開ける。ゴミの山

は整形された台形のものから山積みされた不規則な円錐形のものに変わり、所々にシヨベルカーやブルドーザーが置かれている。36Bがその内の一台、ゴミの斜面に乗り上げる形で止められていたシヨベルカーの車体に乗って辺りを眺める。

季節は短い秋を迎えた9月中旬、時刻は4時半を回り丁度日没を迎えた時。濃い茜色に染まった西空が董色の東空に浮ぶ雲までピンクに染め上げ、思わず見とれるほど美しい夕暮れとなっていた。

(何か感じた?)

彼女が思考会話で尋ねると、36Bも思考会話で返す。

(まだまだ。きみは例のフラッシュバックを見なかったのかい?)

(・・・見たわ)

(ほう・・・管理官たちには話さなかったね)

彼の心は彼女に良く見えていた。それは非難ではなく探りだった。

(直接彼の動向に関するものではなかったから)

(どんな内容だったのか、教える気はある?)

(報告する?)

(とんでもない。するならとくにきみの頭を探っていたよ)

(自信があるのね)

36Bの『笑い』のイメージが浮かぶ。彼が安心させようとしているのだ。

(予言者レリエル様にはただの『ナンバーチャイルド』は逆らえないよ)

(選抜強化指定にして長距離通信マスターのビーさん、嘘はいけないわ)

(まあ、冗談はこの位にしてさ、どうだったの?)

(たいしたことじゃない。ヘリの中で一瞬だったけれど彼のイメージが過ぎただけ。月の光を浴びて直立したイメージ)

(そうか・・・それだけじゃあ、たいして役に・・・)

突然、36Bが会話を中断した。彼女が見やると36Bは茜の空を見上げていたが、やがて目を閉じ腕を組んでシヨベルカーのロー

ディンググシヨベルの形に組まれたアームに寄り掛かった。彼女も道を挟んで反対側の斜面をゆっくりと登り、風に向き合いながら暫く佇んだ。

(レリ?)

(はい、ビー)

(いたよ、感じているでしょ?)

(ええ、感じる)

(どうする?)

(連絡アウセスしてみる)

(接近するかい?)

(ここでいいわ)

(分かった。じゃあぼくは少し先へ廻り込んでみる)

(了解)

36B、この頃は名前がないので仲間内から『ビー』と呼ばれたラミエルは、斜面を滑り下ると小走りに枝道の方へ消えて行った。彼女はその様子を『見て』いたが、やがて東の方角、海が望める方向を向くと、

(ジエイ?)

その方向には軍の射撃訓練場があり3軍統合の兵器実験場も付属していた。

(ジエイ、レリエルよ、答えて)

しかし、その問いに答えはなかった。

(分かった。何も言わなくていいよ?今、行くからね)

彼女は東に昇り始めた十三夜の月を目指して歩いて行った。

§

わたしはゴミの荒野を早足で進んだ。目のせいだと言いついたくなるけど、走ったり泳いだり、素手で戦ったり銃を撃ったり、運動全般は得意じゃない。このときもビニールの紐に足を取られたり、

何か固いものに爪先をぶつけて痛かったり転んだりは無様なアプロ
ーチ。1キロ先からでもわたしが近付いていることが分かっただろ
う。でもそのときはそんなことを気にする必要がなかった。そこは
敵地という訳でないし月が輝いて明るかったし、何より射撃訓練場
は水銀灯の白い光とナトリウム灯のオレンジの光でフェンス周辺が
真昼のようだった。

その軍の占有地境界は例によって高いフェンスで囲われていたけ
れど、これは見せたくないものを守るためではなく、余計な動物や
人間が入り込んで怪我をさせないためのものだったし、セキュリテ
ィも最小限度のものしかなかった。わたしは訓練場の外周道路添い
に移動して、赤色回転灯が眩しく幾つも交差するゲートの一つへと
歩いていった。

§

(レリ?)

(ビー、聞こえているわ)

(ぼくはきみの先500メートルのゲートDから入った。ジェイは、
ぼくの先1キロほどを移動してる)

(了解、少し待って)

彼女は立ち止まると神経を集中して、草叢くさむらが畝々と続くその先を
探る。間もなく臆気な熱を感じ取り、それを更に見据えると脳裏に
紛うことなき人間が身を低くする黒いシルエツトが浮かび上がった。
よく伸びた草叢を揺らさぬようにゆっくりと歩いている。

(ビー)

(聞いているよ、レリ)

(確認した)

(さあ、どうする?)

ビーは自分の意見を先に言わない。いつでも相手の意見から先に
聞き、自分の意見はよほどの事がない限り言い出さない。ビーは慎

重で奥床しい、などと言われる所以だがこの時ばかりは彼女もいらついた。

(あなたはいつたい、どうしたいの?)

(え?)

(確かにここではわたしの方が上級者かもしれないけれど、あなたはどうか考えている?)

彼女の思念に棘を感じた彼は思わず、

こいつどうしたんだ?

と考えてしまう。彼女が感情を顕わにする事など皆無に等しい。

無論、彼女の方も彼の驚きを感じ取り、きつぱりと、

(あなたが決めて頂戴。知つての通りわたしは対敵行動たいていこうが得意じゃない。ジェイを捕縛するしたらあなたが率先してくれないと)

(・・・うん、今回は二人きりでやらなくちゃならないんだつたね。ごめん、悪かったよ。では、ぼくはそのまま背後から彼を追う。君は正面からアプローチして。君が先に追い付いたら、少し時間稼ぎをしてくれないか?一緒にコトに当たろう)

(了解)

外周道路に展開していた軍の保安部隊は、ほとんどが車両の周りに屯たむろするばかり。試しに彼女が数人の思念にアクセスすれば、

特殊部隊がどじつたんだから

奴らが勝手に起こした事故で

自分の尻は自分で、な

やっつけられるかよ、今晚やつとデートにこぎつけたのに!

・・・これではとても協力的とは言えない。彼女がゲートに近付くと、赤色回転灯の洪水の中、偵察装甲車が車体を鈍く光らせていた。そのハッチから上半身を出して、実弾を装填した車載機関銃に腕を掛けた将校が薄ら笑いを浮かべて彼女を見送り、その下、太い後輪に寄り掛かっていた兵士が睨むように見ていた。

彼女は我関せずといった態度で彼らの前を通り過ぎ、ゲートの前へ行くと、警備していた若い兵士に首から下げたIDカードを見せ

る。兵士は必要以上にカードをためつすがめつした後、乱暴に彼女を叩くようにボディチェックをする。胸や尻を撫で回す時、わざと下卑た笑い声を上げたが、彼女は一切反応せず、感情を全く表さない眼差しが兵士のニキビ面を凝視していた。やがて兵士が興味を失い、ライフルの銃身で場内を指し示すと、彼女は敬礼して歩き出す。その後ろで兵士は、

「ガキが戦争にでしゃばって来るとはな」

聞こえよがしに呟くと彼女の方へ痰を吐き出した。彼女は真つ直ぐ前を向き、奥を指指して歩いて行った。

ジェイはまだ草叢を動いている。ビーは、と意識を向けたが気配を殺した彼はざっと探っただけでは雑音の少ない無人地帯であっても捉える事が出来なかった。漸く、密かに移動する彼の気配を感じ取ると、その方向とジェイが進む方向から会合する地点を割り出し、彼女は少し歩く速度を早め雑草に足を取られながらも確実にジェイの方向へと進んで行った。

夜空には真円に少し足りない月。浜風はいつのまにか静まり、周辺を照らす照明も次第に届かなくなり、彼女の向かう方向は月明かりだけが蒼く陰影を刻んでいた。

やがて、蒼白く浮かび上がる元来はゴミの山だった雑草に覆われた起伏の先に、対岸の灯火が美しい入り江が見えた。そこがこの広大な埋め立て地の果てであり、彼女の目的地でもあった。その後、彼女はマンハントの目標を『視認』する。

(ジェイ、そこで止まって)

彼は彼女の先、100メートル程の所を海と平行に南へ向っていた。多分、実験場から脱走した彼は隣接する射撃訓練場に入り込むと、時計回りに隠れながら移動して来たのだろう。

(ジェイ、聞こえるわね？なにもしないから、)

(うそだ)

(うつつん、うそじゃない)

(うそだよ、ぼくを殺すつもりで来たんでしょ?)

(ちがう)

(違うない)

ジェイが立ち止まった。ゆっくりと身体を起こす。月光を浴び、海と対岸の夜景を背後にシルエットを見せている。彼女も外周の明かりを背景に、彼からはシルエットとなって見えているはずだ。やがてジェイが、苦笑するイメージを送りつつ「話し」出す。

(まあ・・・仕方ないね、裏切り者が処分されるのは)

(だからそう投げやりにならないで。少し話し合いましたよ)

(いいね。きみを一目見てから死にたいと思っていたんだ)

レリエルが近付くのを、ジェイは佇たたくんだまま眺めていた。ススキを掻き分け枯草の折れるパキパキという音を響かせて、足元も覚束ない彼女は漸くジェイの前10メートルまでやって来る。

* 3 (承前)

(やつと会えた、レリ)

彼女は月光に照らされて、蒼白く姿を晒す彼を見つめていた。その姿は思わず見直すほど異様なものだった。身長は150センチほど。13歳としては少し低い程度だが短足で少し太り気味なので、見た目は実際以上に太って見えた。

異様なのは上半身で腕が異常に細く長く、その姿は雪だるまに刺した枯れ枝の腕のよう、更に頭が極端に小さく色も黒く、顔の造作自体は悪くないのだがアマゾンの未開人が何かを作る干し首を連想させ、唇がほとんど薄い一本線なので、その印象が高められている。彼女は無表情のままだったが、幾分動揺していた。現実感が薄れ、何か別の惑星の荒野で対峙するかのような、そんなドラマチックな感覚があった。多分ジェイがそういう印象を抱き、彼女が無意識に同調したからなのだろう。

(どう? ぼくのこの姿は透視出来ていた?)

彼女の内心を見透かしたようにジェイが聞く。

(いいえ。いつも黒い影のようによく見えなかった)

(じゃあぼくの勝ちだね。誰かからのアクセスには、ぼく、敏感なんだ。だから誰かが『見て』いたらいつだろうと煙幕を張っていた。分かる? 煙幕)

(言っている意味は分かるわ)

するとジェイは満足そうに『笑う』と、

(ねえ、レリ)

(なに?)

(君は予言者だよな?)

(そう呼ばれているけれど、正確には違うわ)

(それは正確には予知出来ない、という意味?)

(わたしの予言は本物の予知ではない、ということ)

(嘘なの?)

(そうとも言い切れない。フラッシュバックで見る光景は未来そのままの光景ではない、という意味よ)

(じゃあ、ぼくの未来を占って、と言っても無理だね)

(そうね。そもそも、フラッシュバック自体わたしにはコントロール出来ないもの。勝手に浮かぶし、これを見たいと念じても無理だから)

(そうか。残念だな、そんなに先のことじゃないのに)

ぞくつ、と彼女の背筋を悪寒が走る。

(いつの自分を見たいの?)

しかし、ジエイはそれには答えず、

(ぼくがなぜ思考会話だけで君と話をしているか、分かる?目の前にいるのに)

(いいえ)

彼女は正直に否定する。

(へえ、頭の中隅々まで見ても分からないんだ)

彼の方は茶化す気配を漂わせ、それを信じていない、と告げている。彼女は溜息を吐くと、

(ええ、本当よ。相手が考えていることは見えても、元より備わっている性質や身体機能は、それを本人が意識してくれないと結構見え難いものよ。あなたはどうかなの?)

しかしこれにも彼は答えず、

(そっか。ぼくにはそういう難しい事、教えてくれないんだよあいつら。必要ない、ってさ)

(そう・・・)

(まあいいや。ぼくはね、しゃべれないの)

(そうだったの)

(耳も飾りだよ、何も聞こえない)

(そうなんだ。でも立派に思念でカバー出来ているじゃないの)

(立派に、か。そうでもないよ。ぼくは完全でない、期待外れだ、

そう言われ続けた、知ってるよね？)

(うん、でもそれは、)

(ううん、慰めなくてもいいよ。本当だもの)

彼女が言いかけると彼が遮る。その深い闇に彼女ははっとした。彼はゆっくりと彼女に近寄る。そして目の前に立つと、ほぼ同じくらいの身長の人はお互いに見合った。

(しゃべれない。何も聞こえない。けれど、感じる事が出来る。君も目が見えないよね？でも『見えて』いる。尋常じゃないんだ、ぼくらは)

彼は表情にも苦笑を浮かべると首を振る。

(おととい、二人の男がやって来てさ、管理官や養育官と同じで白衣を着ていたけれど、ぼくは初めて見るやつらだった。一人はひどい火傷が顔にあるやつで、他の白衣どもがぺこしてんだ、そいつ、お偉いさんのな。そして暫く養育官や管理官とひそひそ話をした後、出て行ったけれど、そいつらはぼくの方を何度かちらちらと見ていたんだ。で、気になったから、ぼくは養育官にアクセスした。あいつら、ぼくが間抜けだと思ってるから、遮蔽しないで結構いるんなこと考えていて、時々、重大なことが分かるんだけど、その時、ぼくは知ったんだ)

彼の視線が次第に熱を帯びる。彼女はそれを感じ、やがてその粘り付き纏わり付く印象と熱の高まりに否応なしに同調シンクロし始めた。

(ぼくは本当なら今日、6時間ほど前に死んでいたはずなんだ。ここで。ぼくが出来損ないだから、殺せ。訓練中の事故で死んだ、そう言う風に片付ける。そう言いやって来たんだ、やつらは)

自嘲の笑いは口元にも浮かび、彼女にはその押し殺した笑い声が確かに聞こえていた。

(今日の訓練はシューティングの実戦バージョンだった。例の山羊を使うやつじゃなく、犬ね。それもすごいのを何匹も持って来ていた。ぼくはエルやピーと一緒に参加させられたんだけど、まずピーがやられた。一匹に後ろから襲われて、すると他のやつが続けざま

に寄つて集つて。もちろんこつちも必死でやつつけはしたよ、でも数が半端じゃないんだ。百はいたんじゃないかな、それが捕まえた野犬じゃなく訓練された軍用犬だつてことに気付いたときには遅い、つてやつさ。ぼくはね、エルを囮にしたよ)

(え?)

(文字通りの囮だよ。あの子は両腕がない。おまけにきみと一緒に目も見えない。だから走るのはあまり得意じゃないんだ。ぼくは犬の何匹かに暗示を掛けて彼女を襲わせた。その隙に笑いながら眺めていた管理官や、サポートとかいいながらぼくたちが逃げないように見張っていた保安部の連中に精神攻撃をしてやった、ぼくの力じや数分気絶させるのが精一杯だつたけどね。そのあとは・・・)

彼は言い淀んで会話を止めると、自分の手を不思議なものを見るかのように見つめる。そして妙に醒めた目で彼女を見た。彼女は何か言わねば、と思いつつも何も言い出せない。ふと、彼の目線が彼女から外れる。彼女は額に浮かんだ汗を無意識に拭つた。

(ぼくはね、別に死んでもいいんだよ。ぼくには、何も約束されていないから、この世では。君と違ってね。でも、あいつらの言いなりで死ぬのは嫌だつたんだ。死ぬのならぼくなりの死に方をしたい、あんな犬に喰われて死ぬんじゃないでね。で、逃げ出したのはいいいけれど、いざとなると、ぼくなりのケジメの付け方ってどうしたらいいのか分からなかつたんだ。で、うろろろしていた)

(ジエイ・・・)

何か言い続けなければならぬ、と再び彼女は思った。しかし何を言えばいいのか、彼女には思い付かない。慰めようも無い、深い絶望。言い淀んだ彼女がふと見ると、彼がじつとこちらを見ている。(結局、君に頼むしかない。ぼくは弱虫だから、ケジメがつけられない。だからレリ、お願いだからぼくを・・・殺して)

最後は搾り出すように掠れた応えのない願い。殺せる訳がない、と彼女は言おうとしたが、言えなかった。それは真実ではない。それを言つては詭弁となる。彼女は彼を殺しに来たのだから。

まだ13歳の彼女たち。しかし、IQ200を超え尋常ではない生き方をして来た彼女たちは、もう立派に大人の思考をし、故に彼もエルを囿にした時と同様、大人のエゴから行動をした。

彼の長い腕がすつと彼女に伸び、首に掛かる。彼女は動かない。

(殺さないつもりだね?)

それでも彼女は答えられなかった。何か冷え冷えとした塊が彼女の心に生まれ、それが頑なに動くな、と言っている。

(殺してくれないんだ・・・)

彼の小さな両手が彼女の喉笛を掴み、ゆつくりと力が加わる。

(こうしても、だめなの?)

彼女は凍りついたまま動けない。

(いいの?君も死んじゃうよ?)

細い枝のような腕なのにその力は恐ろしいほど強い。彼は腕が震え出す直前まで力を込め、彼女は息が止まり、意識が揺らぎ始める。苦しい。

(いいんだね、殺すよ、レリ)

彼の深い絶望が腕の震えを介して彼女の六感に響いていた。それは割れ鐘の音のように甲高く嫌悪感に塗れたもので、彼女はその音色に麻痺し脱力した。もう、どうでも良くなっていた。このまま死んでもいい、その方が楽だ・・・そして意識が混濁して行くに任せ、足に力が入らなくなり・・・

突然、彼の腕が解けた。彼女は反動で座り込んでしまう。急に圧力が去ったせいかわ、吐き気が突然訪れ、激しく咳き込む。苦しく息を喘がせながら仰ぎ見ると、ジェイが頭を抱え激しく左右に振っている。出せない声がかを叫んでいる。小さな目が剥き出され、口から泡が吹き出る。ヒュー、と息が漏れ身体はガクガク震え、やがて卒倒した。短い足が痙攣し、腕が上下に何度も振れ、地面を掌が激しく叩き掻き進む。そして遂に動かなくなった。

彼女の方は何とか呼吸を整えながら起き上がり、彼の前に行き、しゃがんで彼の顔を覗き込んだ。その小さい目が彼女の目を捉える。

(×××××××、××)

(えっ?)

しかし、既にその目は光を逸していた。

(レリ!大丈夫?)

(・・・ええ、ビー)

(何で抵抗しない!死ぬかもしれないじゃないか!)
(ごめん)

(かわいそうだったけど、仕方なかった。君を殺そうとしていたから。本当に殺そうとしていたんだよ、彼)

(ん、分かってる)

ゆっくりと立ち上がる彼女の脇を擦り抜け、ビーがやって来てしやがみこむと、ジェイの脈を診る。そして彼は、開いたままの目を閉じてやった。

(時間、1905。任務完了。ミッシェルコンプルーテいい?)

(・・・確認した)

(レリ・・・泣いてるの?)

涙が出ていた。見えない、只の飾りに過ぎないはずの眼から涙が溢れて、頬を伝った。生まれてこの方、痛みや苦しさに涙が浮んだことはあったものの感情に流されたことはなかった。

(行きましよう)

彼女は最寄りのゲートに向って歩き始める。そして歩きながら、生まれて初めて誰憚りなく号泣した。

それ以来、レリエルはますます感情に乏しい、無表情な人形となった。

人形といえば、彼女はこの頃からぬいぐるみを好んだ。管理官や養育官が優秀な兵器への細やかなご褒美に、何がいい？と尋ねると判で捺したように、ぬいぐるみ、と答えが返る。仕舞にはレリエルへのご褒美はぬいぐるみ、と決まって、何か任務を達成する毎に一体ずつ増えていった。

養育官が管理官に洩らしたところによると、彼女はそれらに自分が処理した者たちの名前を付けている、とのことだった。

ふと、自分の名前を付けられたクマかなにかを彼女が弄んでいる姿を想像してしまつて鳥肌が立ったよ。その養育官はそういつて笑つたが、その数年後、正に実現してしまうなど彼には思いもよらなかつたことだろう。

不思議の国のアリスや赤毛のアンなど、少女向けの古い小説に没頭したのもこの頃の事で、それまで無頓着だった格好も、正にアンやアリスのような古き良き時代の少女の洋装を好んで着るようになった。

任務にもその格好で参加するようになった。最高位のサイとされるL O T O 1のルシフェルも制服や特務服を嫌いジーンズにTシャツ姿というラフな格好で任務をこなしていたので、止むを得ない場合以外、彼らもそれを黙認した。まさか絵本から抜け出したような少女が、危険極まりない殺し屋とは誰もが思わないだろう、良いカモフラージュになっているとも考えられていたからだ。

一つだけ不思議だったのは、彼女が洋装と同時にサングラスを掛けるようになったことだった。せつかくのよそ行きの衣装をその黒い眼鏡が台無しにしていた。確かに視覚障害者ではあるものの指摘

されなければそれと知られることはない。瞳は見えているようにしか見えない彼女。実際目が見えない事で苦労した事はないはずの彼女がサングラスを掛ける理由が管理官たちには分からなかった。理由を尋ねてもただ無表情に見返すばかりの彼女に、誰もが何も言わなくなるまでさほど時間は掛からなかった。万が一その理由を管理官たちが知ったとしたら、彼らも彼女に対する認識を改めたに違いない。

(目がこわいよ、レリ)

ジェイの最期の言葉が頭の中で幾度も幾度もリフレインして、彼女がああ眼差しを忘れられないことなど彼らが気付く訳はなかったのだが。

§

わたしはまた、『ここ』へ帰って来た。あのフラッシュバックが描き出す世界へ。

所々に低い灌木が見えるだけの高原。時折強い風だけが吹き抜けるなにもない場所、それでもわたしは気に入っている。

初めてこの風景を見たとき、ここでわたしが死ぬフラッシュバックを見た。その姿は老いていたから、多分わたしは生き残るのだろう。それ以来そのイメージは湧かないし、だからそこまで生き残れる確率はそう高くないのかも知れない。だから長生き出来るかどうかは気を付けていれば、だけど、ね。いずれにしてもここは文字通りわたしの心の故郷になった訳だ。

そこにはわたしだけでなく、サイの仲間も数人いた。あのLOTT 01のルシフェルやラミエルも、だ。フラッシュバックの中で彼女たちは何かの農作業をしたり、痩せた馬に乗っていたり、ヤク牛の世話をしていたり、骨を啜えた大きな黒いマスチフ犬と戯れたり、山羊のバターを溶かし入れたお茶を飲んで談笑していたり、ともか

く土地の人々に溶け込んで共同生活をしている様子が窺える。わたしは最近までフラッシュバックの中の彼女たちに近付かないようにしていた。そのときは何の予兆か判断出来なかったためもあるけれど、そもそもわたしは、いくら心を許した仲間でも群れるのが大の苦手だったから。ひとりでじっとしている方が楽だ。

けれど、つい先日わたしは別のフラッシュバックを見た。そこは雪を抱く高い山の中腹で、何かの寺院のようだった。頭を丸めて赤い袈裟をまとった僧侶たちが、吹き曝しの回廊を音も無く行き来している。わたしは朱と黄色に塗られた寺院の柱にもたれて、静かに澄んだ景色を眺めていた。気が付くと自分も頭を丸め僧侶と同じ格好をしていた。すると回廊の向こうからルシフェルがやってくるのが見える。そのうしろにはラミエルはじめサイの仲間たちが。みんなわたしと同じ僧侶の姿で・・・ルシフェルがわたしの前に立つ。につこりと笑って一言。もうすぐ、百個になったら・・・フラッシュバックはそこで終わり、あの荒野との前後関係もはっきりしなかったけれど、それはかつて無いほどしっかりとリアルなイメージで、わたしはきつとそうなるかと確信した。それと同時にわたしはこの先何が起きるのか、何をすべきなのかをはっきりと思い描くことが出来た。

だから今は与えられた任務を淡々とこなしている。獲物が上げる断末魔の悲鳴、もちろん本当に上げさせる訳はなく、獲物が身の内で上げる声にならない叫びだけれど、それを心で聞いても何の感慨も浮かばなくなった。わたしは立派な兵器となったのだ。けれどそれはもう、どうでもいいことだった。わたしは確かな未来を見た。それを夢と呼んでも差し支えないのなら、再び夢を見ることが出来るようになったのだ。

荒野と寺院につながる試練。それは今までわたしが受けた使命のなかで、いちばん大切な、いちばんやりがいのある任務に違いない。何しろ夢が、未来が現実になるのだから。

ぬいぐるみは昨日の任務で九十三個になった。数ヶ月もすればそれが起きるだろう。そう、ほんとうに間もなくだ。

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6307i/>

天使のレリは夢を見ない（R）

2010年10月8日15時31分発行